

翻訳行為における異なるものの存在

齊藤美野

立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科

Abstract

L. Venuti's (1995) translation strategies, "domestication" and "foreignization" can be considered as one of the most important ideas in translation studies. These strategies are developed from ideas of F. Schleiermacher discussed in his famous lecture "Ueber die verschiedenen Methoden des Uebersetzens" in 1813. A. Berman (1984/2008) who studied German Romanticists' discourses about translation, also writes about Schleiermacher's lecture, and Berman's study was quoted by Venuti (1995). All of these three scholars discuss the process of translation relating it with source texts' foreignness or strangeness. They consider foreignness has some positive effect on the translation process and target texts. By reading Berman (1984/2008), we will consider how foreignness functions in the process of translation. This paper especially focuses on Berman (1984/2008), and rereads Schleiermacher's text from Berman's viewpoint hoping to gain more understanding of "domesticating" and "foreignizing" strategies.

1. はじめに

翻訳研究の種々の理論、概念のうち、主要なものの一つと考えられるのが、現代の翻訳研究者ヴェヌティ (Lawrence Venuti) が論ずる「受容化 (domestication)」と「異質化 (foreignization)」という二つの翻訳方略である¹。ヴェヌティの著作、*The Translator's Invisibility: A History of Translation* (1995, 以下副題を省略する) や、*The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference* (1998) において使用される概念である。翻訳行為と文化や社会、イデオロギーなどを関連させて研究するとき、一つの分析法として有効なものだろう。ヴェヌティがこの二つの概念 (翻訳方略) の下敷きにしてるのは、シュライアーマハー² (Friedrich Schleiermacher) の概念であり、さらにシュライアーマハー (及びそのほかのドイツ・ロマン主義者) の思想を紹介、分析している翻訳研究者ベルマン (Antoine Berman) の論考も参照している。ベルマンも、著書『他者という試練: ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(1984/2008, 以下副題を省略する) の中で、ドイツの神学者・哲学者・翻訳者であったシュライアーマハーの講義録「翻訳のさまざまな方法について」(1813/2008) を取り上げている。シュライアーマハー、ベルマン、ヴェヌティの三者は共通して、翻訳行為における「異なるもの」、「異質なもの」について言及しており、また異なるものの存在を肯定的に捉えている。本稿は、ヴェヌティの概念に先行する論考であるベルマン (1984/2008) を中心に、異なるものと翻訳行為の関わり、異質なものが翻訳においてどのように機能するかについて考察し、またベルマンの視点から、シュ

ライアーマハーの論の再確認を試みるものである。さらにそのことから、受容化と異質化方略についての理解も深めたい。

2. ヴェヌティの「受容化」と「異質化」

ベルマンやシュライアーマハーの論考を見る前に、まず両者の論の延長線上にあるとできるヴェヌティの二つの翻訳方略、受容化と異質化について確認しておこう。ヴェヌティは、この二つの概念を用いて、翻訳者の透明性 (invisibility) について論じる (Venuti, 1995)。受容化方略によって翻訳が行われると、起点テキストの異質性 (目標言語の規範・価値観との差異) は尊重されず、目標文化に馴染むような目標テキストが生み出される。そうすると、その翻訳テキストは翻訳作品であるという事実が認識されづらくなり、そのとき翻訳者は透明性の高い存在となる。つまり、その翻訳作品の制作における翻訳者の介在が意識されにくくなるのである。一方の異質化方略においては、目標言語の規範から外れる訳出法が取られ、訳す作品を選ぶ段階においても目標言語の支配的な文化が通常好まず、排除している文化の作品を選ぶことが行われる。ヴェヌティは、アングロ・アメリカの文学界においては、受容化方略が支配的だとし、その状況を変化させるために受容化方略を批判し、代わりに異質化方略を取るべきだと述べる。“The domesticating translation that currently dominates Anglo-American literary culture, both elite and popular, can be challenged only by developing a practice that is not just more self-conscious, but more self-critical” (Venuti, 1995, p. 309). 自文化が排除してきた他文化の作品を選ぶことや、翻訳者が透明とならないような方略を取り、受容化方略に対抗しなくてはならないと考えるのである。

上で極簡単に紹介したヴェヌティの翻訳方略は、先述したようにシュライアーマハーの論考を踏まえたものである。ヴェヌティは、次のようにシュライアーマハーを引用し、自身の論の基盤としている。“...Schleiermacher allowed the translator to choose between a domesticating method, an ethnocentric reduction of the foreign text to target-language cultural values, bringing the author back home, and a foreignizing method, an ethnodeviant pressure on those values to register the linguistic and cultural difference of the foreign text, sending the reader abroad” (ibid., p. 20). さらに、*The Translator's Invisibility* (1995) の“Nation”という章において特に、シュライアーマハーが大きく取り上げられていることから、シュライアーマハーとヴェヌティの論が繋がっていることがよくわかる。本稿は次に、ヴェヌティが引用するシュライアーマハーの講義録を見て、上記引用箇所ヴェヌティが触れているシュライアーマハーの挙げた二つの方法についても確認する。

3. シュライアーマハーの講義録

ヴェヌティによる引用にあったように、シュライアーマハー (1768-1834) は、「翻訳のさまざまな方法について」(1813/2008) の中で、翻訳者がたどることができる二つの道を挙げる。その二つの道、即ち翻訳方法を中心に、シュライアーマハーが翻訳の目的にどのようなことを据えていたのか見ていこう。まず、シュライアーマハーは、翻訳法として多く取られてきた「^{ペラフレーズ}言い換え翻訳」と「^{ナッハビルドゥング}翻案」(ibid., p. 36) を否定する。おのれが行おうとする翻訳行為のあまりに大きな課題にひ

るんだときに翻訳者は、言い換え翻訳や翻案を行ってしまうのだとする。「著者自身と、その著者の言語にはまったく不案内な外国人というのは、ともに無関係な隔絶した人間ですが、翻訳者はこのふたりの関係を、著者ともとの読者との間にあった直接的な関係にしようと試みなければいけないのでしょうか」(ibid., p. 35)。このような大事を行うときに、「翻訳者が読者に提示できるのは、他ならぬ、著者の言語とはまったく一致することのない、読者の言語だけ」(ibid.) なのだから、翻訳行為は不可能と思う翻訳者がいても不思議ではないのだ。このように翻訳という「一種ばかげた企て」の達成に「絶望した」ときに (ibid.)、言い換え翻訳や翻案が行われるという。シュライーマハーは、例えば「翻案家には著者と自分の読者との関連を取り結ぶ気など、もとよりないのです」(ibid., p. 37) と述べこの二つの方法を評価しない。「この二種類のやり方はしかし、身をもって異邦の傑作の真価を知り、その作用を同胞にまで広げたいと願う者には十分ではありえません」(ibid., pp. 37-38) とも述べている。

では、翻訳者が行うべきことは何であるとシュライーマハーは考えたのだろうか。それはやはり、原著者と翻訳の読者の間に何がしかの関係を築くことのようにである。「本来の翻訳者は、まったくかけ離れた人格である著者と自分の読者というふたりの人間を実際に出会わせ、ことに後者を母国語の圏内から無理に引き出さずにはしかもできる限り完全に前者を理解、享受させようとしませす」(ibid., p. 38)。そして、ヴェヌティが論の下敷きとした有名な二つの道が示される。「著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす、あるいは読者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす」(ibid.)、このうちいずれかが翻訳者がたどることができる道だとされる。一つ目の方法では、「読者は、そもそも異質な場所へ、翻訳者の場へと動かされる」(ibid.) という。他方、二つ目の方法は、「著者をドイツの読者世界に引き入れ、ドイツ人へと変貌させているのです」(ibid., p. 39)。この二つ目の道をシュライーマハーは、次のように述べ否定している。「著者がもともと翻訳者の言語で書いていたかのように訳出するという目標は、単に達成できないばかりでなく、それ自体が空疎なのです」(ibid., p. 56)。これは、言語と知識には関係があるからであり、「任意の別の言語に思考を牽かせることなどできないのだ」としている (ibid., p. 57)。

シュライーマハーが推奨するのは、一つ目の道のほうである。それは、翻訳において異質なものが大きな意味をもつからである。シュライーマハーは、「異質なもの」を翻訳において表現する必要性を説く。外国語を滞りなく読める者であっても、外国語を読むとき「何か異質なものを前にしているという感じをつねに持ち続けます。まさにこの感覚を自分の読者に移植しようとする翻訳者は、読者に彼らが異質なものを前にしているのだということをどうやって示してやらねばならないのでしょうか」(ibid., p. 48)。一つ目の道、「著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす」、によって、異質なものは翻訳作品に現されるだろうことはわかる。「翻訳が原作の言い回しに密着すればするほど、その翻訳作品はいよいよ読者には異質なものを連想させるのだと、これまで言われてきている」(ibid.) と述べられている。しかし、この訳出法をとることは、翻訳者にとって「最大の困難」(ibid., p. 49) だともシュライーマハーは述べている。何故ならば、この方法を取れば、不自然な目標テキストが作り出されることになり、それは不器用な翻訳と見なされ批判を受けるからである。シュライーマハーは、「こうしたことは、この種の翻訳者が当然、甘受せざるをえないことです」(ibid., p. 49) と認めている。

それでもなお、シュライアーマハーが、異質なものを翻訳作品に持ち込まねばならないと考えた理由は、次の箇所から推し量ることができる。「この翻訳手法のもっている何にも替えがたい要請とは言語の保全なのです。この方法は日常的なものを超えて、言語というものが必ずしも自由に成長してきたものではなく、むしろある異質なものへの類似を目指して、曲げ撓められながらも伸び来たものなのだ、というのを予感させます」(ibid., p. 48)。このように述べ、起点言語から影響を受け目標言語が成長する可能性を示唆し、洗練されていない訳文だと批判されても、一つの道をたどることが重要だと主張するのである。また次のようにも述べ、異質なものから影響を受ける利点を挙げる。「おそらく、異邦の植物を色々と移植することによって私たちの大地そのものも豊かで多産なものとなり、風土もまたより優美で穏やかなものとなってきたのです。北方的な不活性ゆえに私たちの言語も自分からはさほど動こうとはしませんが、異質なものと多くの面で接触することで生きいきと伸び育ち、固有の力を十全に展開できるのです。この点では、植物と同じに思えるのです」(ibid., p. 68)。外国から異質なものをドイツ語へと持ち込み取り入れることにより、ドイツの言語や文化が成長、発展すると捉えていたことがわかる。このように、シュライアーマハーは異質なものが翻訳において好影響を及ぼす存在だと考え、異なるものを異なるものとして訳出する翻訳法を勧めたのである。

4. A. ベルマン

4.1 「次善策」ではない翻訳

次に、『他者という試練』(2008)に見られるベルマン(1942-1991)の主張を概観し、ベルマンが異なるものと翻訳についてどのように考えていたかその一端を探る。同書は、ドイツ・ロマン主義者の翻訳に関する論考・言説を集め論じた研究書である。その中から本稿において特に取り上げたい点は、ベルマンが翻訳に見出す可能性や価値であり、またシュライアーマハーについて論じた箇所も次節において参照する。ベルマンは次のように述べ、翻訳が最善に継ぐ「次善」の策ではないと主張する。「翻訳は次善策などではない。外国語作品が〈外のもの〉という資格においてわれわれの許にやってくる、その際の作品の存在様態を称して翻訳といっているのだ。よい翻訳とは、外国語作品をわれわれに読めるようにしながらも、そうした外来生(étrangeté)をとどめているものである」(ibid., p. 322, 本文に付された原註より)。この短い引用を読むだけでも、ベルマンが翻訳に固有の価値を与えていることがわかる。また、そうした観点からドイツロマン主義が研究対象となったことは例えば次の箇所から読み取れる。「太古の昔から翻訳という営みは、翻訳を实践する者とその恩恵に浴すもの、双方の手によって掩蔽され抑圧されてきたのだった。この点に関しては古典主義およびロマン主義のドイツはひとつの例外であって、熟考される価値がそこには確かにあるといえる」(ibid., p. 370)³。

ベルマンは、「伝達可能性を隠れ蓑として外国語作品の外来性を系統的に否定してしまうような翻訳」を「誤れる翻訳」(ibid., p.16, [強調原文])と呼ぶ。また、誤れる翻訳を「自民族中心主義的翻訳」(ibid., p. 15)とも表現している。そして、「古典/ロマン主義時代のドイツ語」の「翻訳の様態」は、「非自民族中心主義的翻訳」であったことをベルマン(ibid., pp. 306-7)は示している。これをシュライアーマハーの提唱する二つの道と対応させるならば、自民族中心主義的翻訳は「読

者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす」(ヴェヌティの用語でいえば、受容化)である。そして、非自民族中心主義的翻訳のほうが、シュライアーマハーの「著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす」道(ヴェヌティの用語では、異質化)に対応することになる。

ベルマンの主張は、シュライアーマハーと同様に、目標テキストに異質な要素を持ち込む翻訳法を取ることである。「実際、翻訳学のひとつの軸は、広汎に適用しうる非自民族中心主義的翻訳の理論を鍛えあげることなのだ」(ibid., p. 386, [強調原文])とも述べている。そして、異なるものが目標テキストにおいて現出することは、翻訳作品のエクリチュールとしては当然の「事実」だと述べる。

翻訳だと「感じさせる」翻訳がそもそも誤った翻訳と見なされてしまうこと、それこそが解釈として誤れるものなのであって、翻訳作品のエクリチュールが他には還元しえぬエクリチュールのひとつの様態である点がそこでは理解されていない。翻訳のエクリチュールとは、自国語に外国語のエクリチュールを迎え入れるものであり、おのれがそうした作用の場であるという事実を読者に忘却させるようなことがあれば欺瞞と等しくなってしまうようなエクリチュールなのである(ibid., pp. 322-323, 原註より)。

シュライアーマハーが、たとえ批判を受けても異質なものを表現する翻訳テキストを生み出すことが重要だと主張したのと同じく、ベルマンも目標テキストは翻訳作品だと読者が気づくような、翻訳テキストの性質を色濃くもつものでなければならぬと考える。「翻訳もひとつの『学』そしてひとつの『芸術』とならねばならない」とし、それは、「翻訳が姿を現し、自らを顕示しなくてはならないということ」(ibid., p. 370, [強調原文])だとしている。ここまで、異なるものは翻訳においてどう振る舞うべきかという点から、ベルマンの論旨をごく短く紹介した。次に、ベルマンが同書の中でシュライアーマハーについてどのように論じているか見てみよう。

4.2 ベルマンが読むシュライアーマハーの講義録

ベルマンは、『他者という試練』の一つの章をシュライアーマハーとフンボルトに割いている(第十章「F. シュライアーマハーと W. フォン・フンボルト 解釈学=言語学的空間における翻訳」)。ここでは、その章で述べられるシュライアーマハーの講義録「翻訳のさまざまな方法について」の考察を概観する。ベルマンは、シュライアーマハーの論が、当時のドイツにおいて唯一の「翻訳への体系的かつ方法論的なアプローチ」となりうる研究だったと強調する(ibid., p. 299, [強調原文])。この研究から翻訳法が演繹されること(上述したように二つの道が示される)が、方法論的といわれる所以であろう。体系的というのは、解釈学者であるシュライアーマハーが、「理解行為全体のうちに翻訳を位置付ける」ことにより「理解の全野において翻訳行為の占める領分を画定しようとしていた」ことからである(ibid.)。

ベルマンの分析によれば、シュライアーマハーの翻訳論は、「一種の主体性理論」に依拠する(ibid., p. 300, [強調原文])。他者、さらに自身とのコミュニケーションも解釈行為を伴う、「理解としての翻訳の営み」(ibid.)ということである。しかしベルマンは、シュライアーマハーはこのような一般

的な「翻訳」を言語間の翻訳へと限定し、さらには主に音声言語と関わる「通訳」行為を、主に書記言語と関わる「翻訳」から除いたと論を続ける。シュライーマハーは、外国語から自言語への移し換えの中にある「二つの領域」を区別し、「通訳者がその職責を果たすのは商業生活の領域」であるとし、「本来の翻訳者の管轄は主に学術と芸術なのだ」としている（シュライーマハー、*op.cit.*, p. 27）。別の表現では、通訳と翻訳を、客観的（通訳）か主観的（翻訳）かという観点から区別する。すなわち、シュライーマハーの論では「通訳の営みは極度に単純化されるばかりか、それ自体としての価値をもたず、話の内容に非関与的なただの伝達手段となってしまう」（ベルマン、*op.cit.*, p. 301）⁴。一方の「翻訳」は、著者が「自身の考えをいい表わす」領域である学問・芸術と関わるものとされることから、『主観的』なものの領域」となり、「通訳の営みに属するようなテキストの場合には存在しない自国語との親密な関係の表われでもある」（*ibid.*, [強調原文]）とされる。そしてベルマンは、シュライーマハーが示した二つの道について、「翻訳が間主観的な出会いの過程といい表わされている点」に興味を引かれると述べている（*ibid.*, p. 303）。

ベルマンは、シュライーマハーの「体系論」が「本来的な翻訳と非本来的な翻訳」が存在することを示そうとするものだと考える（*ibid.*, p. 304, [強調原文]）（先述したベルマンの用語で、本来的な翻訳は非自民族中心主義的翻訳と、非本来的な翻訳は自民族主義的翻訳と言い換えてもよいだろう）。察するように、ベルマンが本来的な翻訳と呼ぶのは、シュライーマハーの二つの道のうち「著者をできるだけそっとしておいて読者の方を著者に向けて動かす」方法であり、「読者の方をできるだけそっとしておいて著者を読者に向けて動かす」方法は「本質的な不条理」（*ibid.*）をもつとし、非本来的な翻訳と呼ばれる。「著者をドイツの読者世界に引き入れ、ドイツ人へと変貌させている」、また「はじめからドイツ人がドイツ語で書いたかのように見える」（シュライーマハー、*op.cit.*, p. 39）翻訳が、非本来的な翻訳とされるのは何故だろうか。ベルマンは、非本来的な翻訳は、「母語および他言語への非本来的な関係に対応するもの」だとする（ベルマン、*op.cit.*, p. 306, [強調原文]）。「はじめからドイツ人がドイツ語で書いたかのように見える」ような翻訳は、原著者の母語を否定するものであり、他者の母語を否定することは、自身のものも含め「母語という観念そのものの否定にほかならない」（*ibid.*, p. 305, [強調原文]）。一方の、本来的な翻訳（「読者の方を著者に向けて動かす」という道）の前提条件としてシュライーマハーが示した二つの条件（「外国作品を理解することが、公知の、皆が望んでいることだということ、また自国の言語そのものにも一定の柔軟性が認められること」（シュライーマハー、*op.cit.*, p. 53））に加え、ベルマンは「国語の自己肯定」（ベルマン、*op.cit.*, p. 307）が必要だとする。母語の肯定という考えは、「国民言語がいまだ自己肯定に至っておらず、諸外国語をそれぞれに違った存在として受け入れることも、自身『教養を身につけた』言語として振舞うこともできずにいた当時のドイツの文化的状況と関連する（*ibid.*, p. 305）。母語と本来的な関係（母語を自己肯定すること）が結べたときに、異言語とも本来的な関係（異言語を母語とは異なるものとして受け入れる）が築け、その上で本来的な翻訳が行われるようになるということである。このように、シュライーマハーの講義録にある論点から翻訳行為の重要性が再度説明され、翻訳を次善策などではないとしたベルマンの主張の助けとなっている。そして、異なるものを受け入れる翻訳法を本来的な翻訳と呼び、翻訳者の取るべき方法が強調されているのである。

5. おわりに

ヴェヌティ、シュライアーマハー、ベルマンの論を並べて見ると、三者の間には共通の考えがあることがわかる。ベルマンはシュライアーマハーについて論じており、ヴェヌティはほかの二者を引き自身の論を展開しているのだから、当然といえば当然であるが、翻訳行為における異なるものに対する三者の考えを改めて一度に見ることで、三者の関連を再確認できた。シュライアーマハーの主張が、現代においても繰り返されるのは、翻訳行為において異質なものは除かれ続けているということなのだろう。しかし、それはシュライアーマハーの論が古びないということでもあり、どのような利益を目標言語・文化にもたらすかは別として、異質性を目標テキストに持ち込むことは翻訳行為からなくなることはないだろう。そしてまた、そのように異なるものを異質なまま扱う翻訳テキストこそが、翻訳に翻訳固有の価値を与えるものとなり、そうして、ベルマンのいうように、翻訳は次善策などではなく、独自のエクリチュールを織りなすものとなるのである。

著者紹介: 齊藤美野 (SAITO, Mino) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了、同後期課程在学中。文学作品を題材とした翻訳研究に取り組む。翻訳行為が社会や言語、文化に対しもつ役割と可能性について考察中。

連絡先: minosaito@jcom.home.ne.jp

【註】

1. 例えば、翻訳学の入門書である J. Munday 著 *Introducing Translation Studies* (2008) の9章においてこの方略が紹介されている。また、M. Baker 編 *Routledge Encyclopedia of Translation Studies* (1998) では“Strategies of translation”の見出しのもと“Domesticating strategies”と“Foreignizing strategies”という項目を、ヴェヌティが執筆している。こちらは、ヴェヌティ自身の主張を述べたものではないが、この二つの用語で表わすことができる方略が歴史を通じ取られきたことが記されている。
2. Schleiermacher のカタカナ表記について。本稿では「翻訳のさまざまな方法について」の新訳 (2008, 三ツ木訳) に合わせ「シュライアーマハー」と表記する。ただし、『他者という試練』においては「シュライアーマッハー」と表記されているため、同書からの引用箇所においては引用元の表記に従っている。
3. この引用箇所のあとに、「しかしながら、翻訳との関わりという点で否定しえぬほどの強度を湛えていたにせよ、その時代のドイツが生み出す術を知っていたもの、あるいは実際に生み出すことのできたものが、翻訳についてありうべき真の理論の断片でしかなかったこともまた否定できない事実である」と続き、ベルマンが取り上げた論考・言説は、完成した理論ではないが、現代の翻訳研究のための「資料」として貴重なものであるとしている (ベルマン, op.cit., p. 370, [強調原文])。
4. 現代の通訳 (及び翻訳) 学においては、通訳は「単なる伝達手段」ではなく、(シュライアーマハーが「翻訳」についてそう考えたように) 主体としての通訳者、その主観性が大いに関わる行為であると捉えるのが主流である。例えば鳥飼 (2007) の研究を参照されたい。

【参考文献】

- Baker, M. (Ed.). (1998). *Routledge encyclopedia of translation studies*. London: Routledge.
- Munday, J. (2008). *Introducing translation studies* (2nd ed.). London: Routledge.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London: Routledge.
- Venuti, L. (1998). *The scandals of translation: Towards an ethics of difference*. London: Routledge.
- ベルマン, A. (1984/2008) 『他者という試練：ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(藤田省一・訳)
みすず書房
- シュライアーマハー, F. (1987/2008) 「翻訳のさまざまな方法について：ベルリン王立科学アカデミー
講義 一八一三年六月二四日」(三ツ木道夫・編訳)『思想としての翻訳：ゲーテからベンヤミン、ブ
ロッホまで』白水社
- 鳥飼玖美子 (2007) 『通訳者と戦後日米外交』みすず書房